

# Gプロジェクト2012

Colorful ~咲かせよう未来の花~

佐々木亘, 森永初代, 濱崎千鶴, 中村民恵, 末永勝征

G Project 2012

- Colorful: Make it Bloom all together, Flowers of the Future -

Wataru Sasaki, Hatsuyo Morinaga, Chizuru Hamasaki,  
Tamie Nakamura and Katsuyuki Suenaga

---

Gプロジェクトとは、学芸、情報、テキスタイル（モード部門・パッチワーク部門）、フードの各プロデュースを学生が自主的に選択し、グループでの活動を通して個性の伸長をはかると同時に、コミュニケーション能力の向上を目的とする、現代ビジネスコースの中心的なプログラムである。今回のプロジェクトテーマは、「Colorful ~咲かせよう未来の花~」に決め、制作してきた作品の集大成を大学祭で発表した。各プロデュースがテーマに沿った作品をどのように制作し、演出を行ったかを、学生たちのレポートをもとに報告する。

**Key Words:** [コミュニケーション力][プロデュース力][グループ力][大学祭]  
[未来の花]

---

(Received September 24, 2013)

## 序

Gプロジェクトとは、「コミュニケーション力・プロデュース力・グループ力の育成」という「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略」である。現代ビジネスコースでは、学生個々がグループ活動でのコミュニケーションを通じて集団の中で自分たちをプロデュースする力の育成を目指し、専門教育カリキュラムの特別研究に設けられた四つのプロデュースにもとづき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めることを大きな目標としている。

この教育戦略実現のため、一年次に、「学芸プロデュース」、「情報プロデュース」、「テキスタイルプロデュース」、「フードプロデュース」の四つのプログラムに関連する基礎的な知識・技能を学ばせる。学生には、一年次の終わりに、どのプログラムが自分に適しているかを自主的に選択させる。二年次では、それぞれのプロデュースにおいて、共同で制作活動に着手し、大学祭では、公の場でのプレゼンテーションに取り組む。また、卒業後もその成果を後輩の学

---

\*鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

習教材となるようデジタルアーカイブ化している。

今回は、学生一人ひとりが「未来の花を咲かせよう」という想いを共有し、各自がトリプルパワーを発揮して具体的な成果へと着手した。情報プロデュースでは、さまざまな活動を行ったが、とくに三部構成の舞台発表の第一部におけるオープニング映像でGプロジェクトを総合的に印象づけた。学芸プロデュースでは、未来へと続く終わりなき夢を描いた動く絵本で舞台発表の第二部を演出した。テキスタイルプロデュース（モード部門）では、ドレス制作を通して表現力を養い、舞台発表の第三部で、一人ひとりがそれぞれ個性的な未来の花を演出した。テキスタイルプロデュース（パッチワーク部門）では、共同制作におけるカラフルな花やシュシュの制作を通じて大学祭を盛り上げた。フードプロデュースでは、アップルパイとクッキーの制作と販売を行うと同時に、Gカフェで今年も新商品を販売するなど、一・二年生が一致協力して、大学祭における憩いの空間作りに取り組んだ。

本報告は、2012年度に行われた「Gプロジェクト」の内容に関する情報発信を意図している。現代ビジネスコースにおける教育戦略は、この報告を一つの反省材料として、さらなる発展を模索していく。

## I. 情報プロデュース

情報プロデュースの2012年度選択者は5名と前年度より少なかった。取り組み状況については、リーダーを務めた成尾葵姫の報告を参照されたい。活動も5年目を迎えた2012年度は、情報プロデュースの活動が、現代ビジネスコースのみならず、全学的にも認められるようになった。そのため、他学科などからの協力依頼も増え、その依頼の一つが、2012年7月21日（土）に本学大講義室にて行われたシンポジウム「鹿児島の未来遺産－自然・歴史・文化－」のチラシ作成である。

「江角学びの交流センター」のセンター長の依頼により、これを浜元彩香、古川ひかりが担当した。学内からの依頼と言っても、依頼者と直接打ちあわせをする時間もなかなか取れず、主にメールでやり取りし、指示を仰ぐことになった。文章だけで依頼者の意図を汲むことになったため、完成させるまでにはかなりの時間を要した。依頼者の要望に応えるだけでなく、場合によっては、依頼内容を越えた範囲まで自分たちで調べ、その結果を反映させることが仕事の出来栄を左右する。この経験によって、仕事は受け身ではなく、積極的に取り組むことが重要であることを認識したはずである。

また、「聖母行列」を学外の方に紹介するための動画作成を行事担当教員より依頼され、これを成尾葵姫、浜元彩香が担当した。「聖母行列」は、世界平和祈願を行う本学のシンボルで、聖母マリアをたたえる本学の伝統行事の一つである。学内行事は、行事ごとに担当を決め、ビデオやカメラで撮影を行っているが、外部の方に紹介するためには、シーンごとに説明を加える必要がある。これは、本学の事情に通暁している元教員のSr.川上カズヨに解説いただき、短い説明文を添えることにより、完成させることができた。行事の雰囲気伝えることに重点を置いたため、学生たちが撮影した雨天時の写真ではなく、毎年聖母行列を撮影している教員から天気の良い年の写真を提供していただいた。

このように、現代ビジネスコース以外からの依頼を受けたことで、授業の他では接する機会の少ない教員との関わりに、学生たちは当初戸惑っている様子であった。その一方、自分たちの活動を評価してくれる存在は、学生たちに、目には見えない形で、勇気を与えていたようである。

こうした依頼のほかに、昨年度から始めた「情プロ新聞」を引き続き発行するなど、学生の活動は多岐にわたり、一部の学生に対して、大きな負担がかかった面もあるようである。しかし、一年に及ぶ活動を通し、お互いに苦手とする部分を補い合い、協力して活動に取り組もうとする姿勢が育まれたように感じる。例年以上に土曜日や夏休みなどの休みを返上し献身的に活動を行い、また活動の拠点であるパソコン教室などの環境整備にも協力を惜しまない学生の態度に、後輩たちの模範となりうる存在への成長を感じることができた。現代ビジネスコースの良き伝統を築く形が見えてきた一年となった。(森永初代)

情報プロデュースでは、一年間を通してパソコンのスキルアップを目指し、WindowsやMacの機能を学び実践的に活用してきた。前期の活動は個々のスキルを高めることを目標とし、講演会の案内チラシや名刺作成、聖母行列等の行事をビデオ撮影・編集・DVD制作するなど、さまざまなことに挑戦することができた。MacのアプリケーションiMovieの予告編機能を使用し、体育祭予告ムービーを制作、キャンパス見学会にて情報プロデュースの活動として紹介した。昨年に引き続き制作した「情プロ新聞」は、行事ごとに分担していたため、あらかじめ決めていた書式や表現の統一には予想以上の時間を費やし、実際に発行したのは、大学祭の直前であった。

また、夏休みにも都合が合うメンバーで活動を行った。前期に引き続き平日は毎日活動を行い、「情プロ新聞」の作成や大学祭のオープニング映像に使用する素材の撮影に励んだ。中にはいろいろな事情でほとんど活動に参加できないメンバーもいたが、進行状況を互いに共有し、役割を分担し作業を進めることができた。毎日、共に活動し、また参加できないメンバーとも活動内容を情報共有することで、今まで以上にプロデュース内の絆も深まったと感じる。

夏休みの後半から大学祭への取り組みを本格的に始めた。大学祭では、これまで学んだ知識や技術を活かし、「展示部門」と「発表部門」にて活動成果の発表を行った。情報プロデュースにおける活動の中心となる「発表部門」では、例年同様、映像制作を担当し、舞台発表のスタートを飾るオープニング、浴衣による作品ショーの背景、舞台を締めくくるエンドロール制作を行った。

今回、オープニング映像の制作にあたり、企画書を作成した。企画書の作成は初めての経験で、インターネットで企画書の書き方を検索し、作成にあたった。共通認識を得られるように先生方や各プロデュースのリーダーに企画書を配布したが、配布しただけで十分な説明を怠ったために、自分たちの意図した構成や内容がうまく伝わらない結果となってしまった。しかし、企画書を作成したことで、少なくとも情報プロデュース内では、「Gプロジェクトの魅力を伝えると共に、みんなを笑顔にする映像を制作する」ことが目的であるという、共通認識は得られた。

自分たちの作りたい映像のコンセプトをはっきりさせることにより、自分たちの中で漠然と

していたイメージがより明確になり、撮影の際に自分たちが必要とする絵(動画)も撮りやすくなった。プロジェクトテーマに込められた“今はまだ小さな蕾だけど、一人ひとりがそれぞれの色の花を咲かせる”という想いを、それぞれの個性を色にとえ、現代ビジネスコースの学生の日という形で、大学祭までの個々の頑張りを表現することに決めた。

オープニング映像の素材には4月から撮影を続けてきた動画と写真を使用、Macのアプリケーションで加工・編集を行った。動画の加工・編集にはiMovieの豊富なエフェクト(効果)を使い、動画の繋ぎを自然な流れにすることができた。

今回、私たちがオープニング映像の中で一番時間をかけたのが、場面転換である。Gプロジェクト紹介でのプロデュース間の場面転換に、ビデオカメラのズーム機能を利用した。出演者が持つスケッチブックのページをめくる際、撮影者がズーム機能を使って場面を転換させる仕組みである。紙のスケッチブックに貼ったプロデュース紹介の資料はKeynoteを使用して作成した(図1)。今までの作品とは違うイメージにしたい、自然な場面展開を行いたいという二つの気持ちで、互いに案を出し合い決定した。しかし、動画編集の際、撮影場所によって明るさが違うため、繋ぎ目が不自然になってしまった。これを調整するために、iMovieのビデオ調整インスペクタを使用して彩度や明度の調整を行った。この機能とエフェクトを追加することによって、自然な場面転換を演出できた。

また、サブテーマ“～咲かせよう未来の花～”を意識し、レースを花に見立てた時計で時間の経過を表現するなど(図2)、さまざまな場面で花の素材を取り入れ、オープニング映像の最初と最後に「COLORFUL」と書かれた同じスライドを用意し、最後のスライドに花の素材で作ったGの文字を背景に挿入(図3)、大学祭までの個々の成長を表現した。花の素材などは、本学図書館にあるフリーのデータ素材集の書籍を使用した。

リハーサルではさまざまな視点から指摘を受け、その都度編集作業を繰り返した。特に、頭を悩ましたのは情報プロデュースの次に発表する学芸プロデュースとの画面切り替えの問題である。上手くいかない最大の原因は、作品の画面サイズの比率の違いにあった。原因に気づいた時点では、比率を変更するには時間的にも困難で、作品を作り始める前に確認していれば、このような問題は起きなかったと感じる。

大学祭への取り組みを通して、一つのプロジェクトを成功させることの大変さと同時に作品を作り上げたときの大きな達成感を得ることができた。昨年度の反省を踏まえ期限内に完成させることを優先したため、

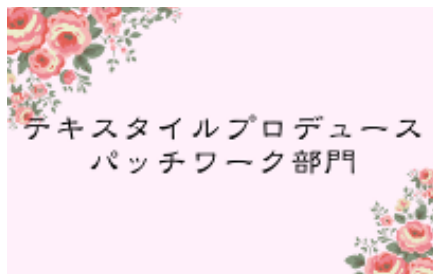


図1 プロデュース紹介



図2 登校場面



図3 オープニングテスト

作業の負担が偏ってしまった。今年度の5人のメンバーは、学生会や大学祭実行委員などそれぞれに役割を担っていたため、作業を始める前に最低限の役割分担をすべきであった。映像制作では、ほかのプロデュースと協力して作り上げる協調性の大切さ、目標を達成するための相談・定期的な確認の重要性、周りと情報共有することの難しさを学んだ。舞台発表部門のリーダー同士のミーティングの回数を増やし、お互いの活動内容やスケジュールを確認しメンバーに連絡することで、お互いを思いやり理解することができ、絆も深め物事がスムーズに進むようになったと感じる。それぞれに苦戦しながらも頑張っていることが分かると良い刺激になり、今まで以上にやる気も高まった。支えあえる仲間がいたからこそ苦しいこと、辛いことも諦めずに取り組み、大学祭を成功させることができた。この一年間で、学べば学ぶほど、自分がまだ知らないことの多さに気づき、興味の幅が広がった。どんな状況に置かれても、新しいことを学ぶ姿勢を忘れず、自身の成長へと繋げていきたいと思う。(成尾葵姫)

## Ⅱ. 学芸プロデュース

学芸プロデュースの共同研究では、大学祭での発表を目指し、「動く絵本」作りに取り組んだ。2012年度は、新たに背景も含めて絵を完成させた。そして、それらをパソコンに取り込み、録音した台詞と音楽を一体化させたのである。

学生自らが積極的かつ主体的に取り組んだ結果、「ENDLESS DREAM～終わりなき夢～」という「動く絵本」はどうか無事完成し、大学祭二日目の2012年10月28日(日)に、大勢の観客の前で発表することができた。いろいろ反響もあり、それなりに好評を得たように思われる。

しかし、今回は全体のスケジュールが大幅に遅れ、学生は夏休み以降も、作業場所である私の研究室に通いつづけることになった。この点は、個人研究の論文にも言えて、最終的に全員の論文が完成したのは、提出期限を一週間も過ぎてからであった。このことを反省し、次回からは早めの行動を徹底させなければならない。

ただし、遅延の主な原因は、昨年度よりメンバーが一人少ない6名にもかかわらず、質・量ともにより良い作品を目指したためである。実際、その努力は、図書館寄贈している『学芸プロデュース論文集』の頁数が、昨年度より上回っているという点に、明白であろう。個の努力をいかに総合・統合して全体の結果へと結びつけるかが、今後も大きな課題となるであろう。(佐々木巨)

学芸プロデュースは、大学祭で発表する動く絵本を作成した。今年度は、全体的にクオリティの高い作品を目指すために、各自アイデアを出し合いながら独自のスタイルでの発表ができるように発案、検討を重ねた。

まず、プロジェクトテーマに合わせた、学芸プロデュースでのテーマを決めていった。「Colorful」に関連する言葉を、今年度の出来事や感じたことから挙げていくと、夢や希望、感謝の心、友情の大切さ、思いやりの必要性、仲間との繋がりなど一人ひとりが感じていることがわかった。そして、その中から一番に伝えたい全員に共通するテーマを考えていった結果、「ENDLESS DREAM～終わりなき夢～」に決定した。

観てくださる方にテーマを伝えるために、私たちはある一人の女の子が挫折を通して周りの人への感謝,そして努力することの大切さに気づき成長していくという物語展開にした(図4)。

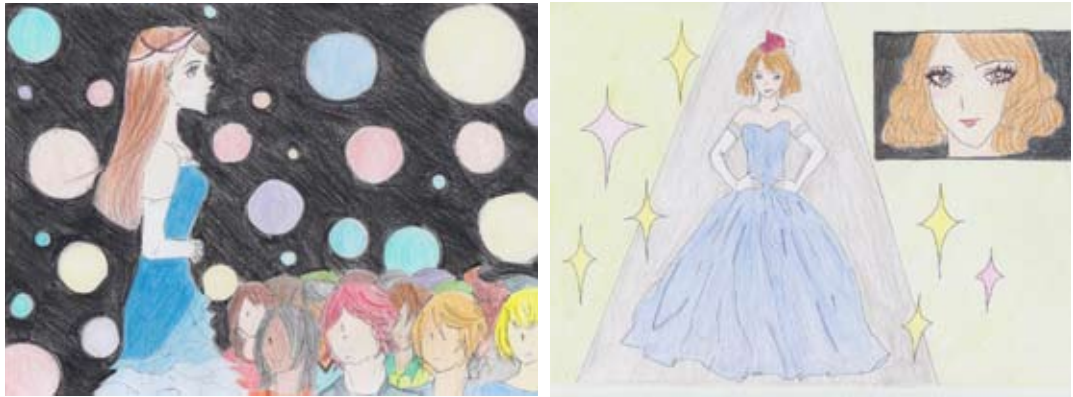


図4 本年度の動く絵本の原画

まず私たちが取りかかった作業は、大まかなストーリー設定,そして登場人物を考えることであった。さらに,登場人物に関する細かい性格を設定し,演技手である私たちの声の高さやトーン,また実際の性格などと照らし合わせながら,皆で相談し,ストーリー全体を決めていった。

その後は,写真の通り,まず絵コンテを作成した(図5)。そして,これを参考に細かいセリフなどを考えるシナリオ作成と原画作成,これら二つの役割に分かれて取りかかった。こうして役割を分担したことで,効率的に作業を進めることができたのだと思う。



図5 原画作成

また,今年の動く絵本では,枚数を昨年の24枚から38枚と大幅に増やすことで,観る人を飽きさせることなくパワーアップした演出と躍動感を表現できるように,1枚1枚に動きをつけるように心がけた。

その後は声に感情を込めることや録音マイクやパソコンの慣れない操作に悪戦苦闘しながらも,ついに動く絵本が9月下旬に完成した。

今年は録音したデータをCDに焼き,舞台発表時に流すことでナレーションの負担を軽減することにした。初めて挑戦したこともあり,苦労した点が少なくなかった。

まず,大学祭二週間前のリハーサルを通し,実際に大講義室で聞いてみると,声の小ささが気になった。そのため,何度も録音し直した。編集をしている際はあまり気にならなかったが,録音マイクの接続がきちんとできていなかったがために音が小さくなってしまったことに気がつき,音が最大になっているかをしっかり確認してから録音作業を行った。録音マイクにできるだけ近づくと,はっきりとした声が録音できるようになった(図6)。

他にもリハーサルを通して数多くのミスが生じたり,修正点が見つかったりした。しかし,動く絵本の大半は9月に完成していたため,急な変更や録音し直しといった作業にも,余裕を



持って対応できた。もし取りかかりがもっと遅ければ、動く絵本は完成しなかった可能性もある。メンバーみんなで力を合わせ、集中して取り組むことで、効率よくスムーズに作業が行えたと考える。

一年生の支えと今まで練習をしてきた成果があり、本番での舞台発表は無事に大成功。私たちは、努力することの大切さを忘れずに夢をあきらめないでほしい、という私たちの想いを込めて、メンバー全員でこの作品を完成させた（図7）。観てくださった皆様の心に、このメッセージが届いたことを願っている。

この学芸プロデュースの「動く絵本」の制作を通して、私たちはチームワークの大切さを学ぶことができた。これから社会へ出るにあたって、夢をあきらめず、目標に向かって前進していきたい。（中尾絵里）



図6 録音編集作業



図7 エンディング

### Ⅲ. テキスタイルプロデュース（モード）

テキスタイルプロデュース（モード部門）では、プロジェクトテーマに基づく舞台発表で、大きな花を咲かせたいという考えのもと、オリジナルドレスの制作に取り組んだ。メンバー18名で協力しながら、それぞれの個性を表現するために積極的に活動を行っていた。夏休み期間中もそれぞれに制作活動を自主的に行っていたが、計画通りには進まず9月に入ってからの追い込みで何とかそれぞれの作品を仕上げる事ができた。

また、前年度の反省をもとに、リーダーが主体となり舞台発表の基本となるウォーキング練習を4月から定期的に行っていた（表1）。しかし、緊張感がないまま練習していたため、その効果はなかなか見られなかった。これは、リーダーも学生同士での初期レッスンにおいてお互いに指摘し合うことができなかつたと報告している。その結果、演者としてのクオリティを求める教員からの指導を本番直前まで受けることとなった。

舞台を構成するなかで、テーマを踏まえながら、それぞれの個性を表現することに学生たちも苦慮していた。それぞれの想いをオリジナルドレスに込めて制作しているため、それをどのように組み合わせていくかが、演出の見せどころとなる。演出や舞台構成の意思疎通を図るため、学生たちはミーティングを毎回の舞台練習が終わるたびに行っていた。チームワークの基本は、やはり話し合い（ミーティング）にあると言える。10月に入るとほぼ毎日のように行い、

お互いの想いを咲かせることができるように話し合いを重ねていた。

また、活動を通して、学生自身が自分と向き合うことができたことは、Gプロジェクトの柱でもある人間性を高めるうえでの成果である。メンバー同士が本気でぶつかり、自分と向き合い、この活動で培った人間性は今後の社会生活において大きな糧になると考える。今回、5回目のGプロジェクトを迎えるにあたり、卒業生の存在は大きい。後輩たちの舞台発表のために指導にかけつけ、的確なアドバイスをしてくれる。毎年、こうして先輩たちが後輩たちとつながっていく「絆」もこのプロジェクトの大きな成果である。(中村民恵)

2012年度のテキスタイルプロデュース（モード部門）が一つのプロジェクトを完成させるまでに工夫した点は、ミーティングを綿密に行い、メンバー同士の意思疎通を図ったことである（図8）。しかし、意見を述べるができる人とできない人との個人差を感じた。また、一つのテーマの中で個性を表現するため、メンバー同士が意見を出し合ったが、なかなか個人が魅せたい部分を全体として活かすことができなかつたことが反省点である。制作活動においては、早い段階から計画を立て、工程を揃えるために制作期限を決めた。そして、装飾段階までは、個人差もなく制作活動が進められた。



図8 ミーティング

表1 舞台構成のスケジュール

4月	ウォーキング練習開始 二年生の係を決める
5月	一年生の係（アシスタント）決定 ヒールでのウォーキング練習開始
6月	週1回のミーティングを開催 週1回15分のウォーキング練習を継続
7・8月	招待状作成，出演順の検討開始 舞台で使用する選曲開始
9・10月	舞台練習，製作調整，曲編集，照明決め 大講義室にて全体練習 リハーサル，本番

4月から授業外での活動としてウォーキング練習を開始したが、舞台での練習になると、なかなかそれぞれの個性を出すことができず苦戦した。しかし、毎回のミーティングを通して、お互いに意見しあいながら活動を継続した点は良かったと感じている。

プロジェクトテーマを表現していくためにそれぞれのオリジナルドレスの個性を活かせるように構成しなければならなかつた。まず、私たちが考えたことは今回で5回目の節目の年であること、多くの人命や財産を失った東日本大震災から一年半が経過するなか、被災者の方々が懸命に復興に向かう姿に、私たちにできることは何があるかということを考えながら構成に取り組んだ。

私たちは、被災地の瓦礫の下から力強く芽生えた花に、生きることの大切さを学んだ。それ



は、その花を見た人たちのところにも花が咲き、その花を見た人たちの笑顔に、花の持つ力を感じた。花は人のところを笑顔にする力を持っている。花を見た人のところに花が咲き、そして、ところの花は笑顔に変わる。私たちも「誰かのところに咲くような花になりたい」とチーム一丸となって願いを込めた。

舞台のはじまりに、花の芽生える様子（つぼみ）を表現するためにシルエットを取り入れた。次にカラフルな色でさまざまな舞台をつくり、個性あふれる花たちを表現し、エンディングで一つの大きな花を咲かせるという舞台構成にした。純心という大地はわたしたちにとって厳しく、嵐の日もあり、挫けそうになったときもあったが、共に歩み、励ましあう仲間がいたからこそ、しっかりと大地に根をはり、花を咲かすことができたと思う。

しかし、舞台を作りあげていく中で、メンバーの一人でも欠けてしまうと練習などに支障が出てしまうことから、集団行動の難しさを感じた。このことから一人ひとりが自覚と責任を持ち行動することが大切だと改めて学び、メンバー全員が意思疎通を図るためには、多くの時間を費やさなければできないことを痛感した。そのため、ミーティング＝話し合うことの意義を理解することができた。また、卒業後の厳しい社会の中で一人ひとりがそれぞれの未来の花を力強く咲かせていかなければならないと、決意を新たにした。（森田幸枝）

#### □舞台構成モード部門

- オープニング《花の芽（つぼみ）》  
ライトをダウンして、シルエットの美しさで花の芽生え（つぼみ）を表現  
縦のラインを強調したドレス（図9-a）
- シーン1《花が咲いた様子》  
花の美しさと優しさを表現  
パステルカラーのドレス（図9-b）
- シーン2《可憐な花》  
清楚で花のもつ愛らしさを表現  
オフホワイトのドレス（図9-c）
- シーン3《快晴の日に咲く花》  
オーガンジーのもつ軽やかさをいかし、太陽の下で、輝く花のすがすがしさを表現  
プリンセスラインのドレス（図9-d）
- シーン4《嵐の中でも咲く強い花》  
自然のなかに強く、美しく、咲く花をシルエットに活かしながら表現  
赤のドレス⇒タフタ地（図9-e）  
紺のドレス⇒身頃にケミカルレース使用（図9-f）
- エンディング《満開のカラフルな花》  
花がもっとも美しく咲き誇った状態を表現  
生成りのドレス⇒トレーン（図9-g）  
黒のドレス⇒胸元の大きなリボン（図9-g）  
ワインカラーのドレス⇒ネックラインのフリル（図9-h）  
ゴールドのドレス⇒アシンメトリーのフリル（図9-h）



図9-a



図9-b



図9-c



図9-d



図9-e



図9-f



図9-g



図9-h

#### IV. テキスタイルプロデュース (パッチワーク)

2012年度のテキスタイルプロデュース (パッチワーク部門) の選択者は7名であった。前年度に比べ選択者が少なかったが、その分まとまりやすく、協力体制も整っていた。前期は大学祭に向けて各自作品を制作し、大学祭前は個人作品の仕上げと共同作品・現代ビジネスコース二年生全員のシュシュの制作を行い、大学祭後は、それぞれ新たな作品の制作と「布」をテーマに研究を行い、発表の場を設けた。

作品制作に関しては、選択者が少なかったこともあるが、一人ひとりを丁寧に指導することができ、学生たちもお互い励まし合いながら制作に取り組んでいた。個人制作は、パッチワークの技法のほかにアップリケや刺繍を加え、またレース等も使用した。時にはデザインや配色(布選び)、および縫う作業が思うように進まず、考える時間の方が長いときもあったが、その分、自分が想像していたものができ上がったときの喜びや達成感は大きかったと思う。

共同作品は、プロジェクトテーマにあわせて制作した。一人ひとり咲かせる花の色は違うので花びらの色を全色変え、その花びらに現代ビジネスコース二年生の名前を、花の中心には「G」をいれ、心をついに花を咲かせていこうという想いを込めた。花びらの色を決め、その色に合う糸の色、糸の種類を選ぶのに多少時間がかかっていた。糸は自分たちの人生がきらきらと輝けるようにとの想いを込めてラメ糸を使用し、刺繍は簡単なアウトラインステッチにした。花びらに全員の名前を刺繍した後、アップリケで土台に縫いつけ、キルト芯をはさんでキルティングを行った。キルティングは花びらと葉っぱには落としキルト、空いているところには花の

模様をあしらった。7人の想いがたくさんつまった作品に仕上げることができた。

シュシュは、時間もなかったので制作しない予定だったが、パッチワーク部門以外の学生たちから作って欲しいという依頼を受け、急遽制作することにした。制作するに当たってはGプロジェクトのテーマの「花」をもとに、花柄の布を選び、柄と無地のリバーシブルにした。短期間で作るようになってしまったが、友達の喜ぶ顔を見ることができ、また大学祭後も使用してくれていたもので、作った学生たちは満足していたようである。

作品は一言ずつコメントをつけ大学祭で展示し、お客様に見ていただいた。コメントをつけることで、ご覧いただく方にも学生たちの作品に込めた想いが伝わったのではないかなと思う。一年間の活動を通して、自分の想いを作品の中に表現することの難しさと同時にその楽しさを、またお互い励まし合えたことで仲間のすばらしさを実感していたように感じられた。共同制作においてはより良いものを作り上げるために、お互いの考えを伝え取り入れることで、協力性や協調性がみられるようになった。(濱崎千鶴)

パッチワーク部門では大学祭に向けて個人作品、共同作品、シュシュを制作した。今年の大学祭のテーマは「Share Happiness ～∞の笑顔とつながる輪～」だった。そこでテーマに合わせ、みんなが笑顔になる作品を作ろうと目標を立てた。

#### □個人制作

思い思いに好きなものを作った。パッチワーク、キルティングでは布の色、柄、配置まで工夫を凝らした作品に仕上がっている。バッグや壁掛け、じゅうたん、ブランケットなど日常生活でも活用できるものを制作した。全員キルティングをしたことがなく初めての作業に苦戦した。個人での作業でいくら縫っても作業がなかなか進まなかったり、指に傷ができ痛くなったりと嫌になることもあった(図10)。

また、大学祭までに作り上げなければならないという焦りもあった。苦勞を乗り越えるために友人と一緒に制作したり、完成した作品を想像しながら前向きに制作に取り組んだり工夫しながら制作を進めることで最後まで作り上げることができた。オリジナルの作品を作り上げることで、制作への楽しさと達成感を実感した。

#### □共同制作

プロジェクトテーマに合わせ、花をモチーフにした作品にしようと思った。一人ひとりが制作に携わるため作業を分担し、全員で完成させた傑作である



図10 個人制作



図11 共同作品

(図11)。花びらの色はそれぞれの個性を

表すためカラフルにした。花びらの中にはコース二年生の名前を刺繍し、みんなで協力して一つの花を咲かせたいという意味を込めている(図12)。

また、中心のGの文字には一年次に制作した浴衣の布を使用した。コースで学んだことが今の私たちを作り、それぞれ個性のある花を咲かせ、これからも咲き続けるという意味を込めた。作業を進める過程で名前がなかったり、花びらの大きさがバラバラになったりとトラブルもあった。しかし、冷静に話し合い完成に向け制作を進めた。大学祭ではみんなに見ていただくことができ、とてもうれしく思う。パッチワークは基本的に個人の作業だったが、みんなで協力して一つの作品を作ることで絆が深まったと感じている。

大学祭でコースの連帯感を高めたいと考え、シュシュを制作した。色はピンクとオレンジの二種類、みんなに大学祭以外でも使ってほしいと思い、シンプルなサテン生地と女の子らしい花柄の生地を使い、リバーシブルに仕上げている(図13)。作り方は販売されているシュシュを参考に試行錯誤しながら制作した。7名という少ない人数で作りあげるの難しく、効率よく制作するために分担し、流れ作業で取り組んだ。

反省点はシュシュ制作への取り掛かりが遅かったことである。家に持ち帰ったり、夜遅くまで残ったりと大変だった。先生方やモード部門選択者にも手伝っていただき完成することができた。シュシュを渡すとみんな喜んでくれて笑顔を見るとうれしく感じた。シュシュを作ることで周りの人との絆を感じた。また、計画的に進めることが大切だと改めて学んだ。

大学祭では作品が見やすいように作品用のパネルを用意した。ブランケットとじゅうたんはサイズが大きくパネルに展示することができなかつたので廊下に展示した。同じところに展示することができなかつたのが残念である。展示作品を見て「かわいい」や「欲しい」と声をかけていただき達成感を感じた。これからの生活の中でパッチワークの活動を通して学んだ技術や計画性、協調性を活かしていきたいと思う。(岡村ひかる)



図12 名前の刺繍



図13 共同作品のシュシュ

## V. フードプロデュース

2012年度のフードプロデュースの選択者は25名であった。フードプロデュースでは「鹿児島の食、郷土料理」について学び、調理すると同時に、インターンシップ先へのお礼と大学祭で販売する「アップルパイ」の試作・制作を行った。授業外では大学祭で販売する「クッキー、Gカフェ」の試作を行い、販売までたどりついた。大学祭における販売品においては、材料の



原価計算、材料の発注、諸経費、売上金の計算等、すべて学生たちが行い、昨年の純利益を上回った。

今年度は大学祭で販売するに当たり、保健所からの指導が従来に比べ厳しくなり、リーダーおよびサブリーダーは多くのことを学んだはずである。詳細はリーダーの西村琴奈が報告しているが、アップルパイ、クッキーに関しては、①短期間の菓子製造許可の申請、②賞味期限検査、③ラベルの表示の仕方などである。また、Gカフェに関しては、実際に保健所に足を運び、担当の方と話をしたことも勉強になったはずである。一つのものを作り、販売するためには多くの手続きや人の手が必要であること、安心・安全に細心の注意をはらわねばならないことなどを実感したのではないだろうか。また、ほかの学生が作業しやすいように、計画を立て、説明を行い、実際に人を動かすことの大変さを、身をもって感じていたようである。一つのことを行うたびに反省会などの振り返りをして、次につなげそれを繰り返しながら成長していったのではないだろうか。リーダー、サブリーダー以外の学生は、自分の役割をしっかりと把握し責任をもって作業すること、協力することの大切さを学んだはずである。

試作を繰り返して新商品を開発し、パッケージ等を考え、でき上がった商品をお客様が喜んで手にしてくれる姿を見て、携わった学生たちは苦労した先には必ず喜びがあることを実感し、達成感を味わうことができた。

大学祭での活動を通して、Gプロジェクトの目標である企画力、表現力を少しでも身につけると同時に、それを実行することの難しさと実行（行動）しなければ前に進まないことを実感したことであろう。これから先、学生時代に学んだこと、身につけた力を、社会の中で発揮し、社会に貢献することを大いに期待したい。(濱崎千鶴)

フードプロデュースでは、毎回の調理実習で鹿児島島の郷土料理を作り、鹿児島島の女性として多くの食についての知識を学んだ。大学祭では、二年生がアップルパイ、一年生がクッキー、一・二年生合同でGカフェの運営を行った。

プロジェクトテーマに沿うよう一人ひとりが心を込めて同じ思いで商品を作り上げることを目標に、全員で協力し合い大学祭成功に向けて準備を行った。当日は予想を超える大盛況で、すべての商品を完売することができた。

#### □販売商品について

簡単にではあるが、販売商品について説明していきたい。

#### ○アップルパイ (図14)

現代ビジネスコースのアップルパイは、本学の初代学長酒井ミヤ子先生がアメリカ留学中（1950年）にアップルパイの作り方を習得し、帰国後、シスターや学生たちに伝授されたのである。

2012年も、少しでも多くの義援金を寄付できるよう、昨年に引きつづき、紅玉より安いジョナゴールドを使用し、りんごは青森産を使用した。また、現



図14 販売用アップルパイ

代ビジネスコースの特徴であるクッキー生地と甘くゴロゴロとしたりんごの相性を考慮して、納得のいくものを完成させることができるように、試行錯誤を繰り返した。大学祭当日は、二日間ともに長蛇の列ができ、シナモンあり49個、シナモンなし50個をすべて完売することができた。

#### ○クッキー (図15)

クッキーは、7月までに3回の試作を行い、その中でダージリン、紫いも、コーヒーなど計十三種類のクッキーを試作した。その結果、昨年度のアールグレイ、抹茶、チョコチップ、アーモンドココア、ココナツの五種類と、私たちが試行錯誤の末選んだ、黒ごま、白ごま、キャラメルチップの三種類に決定した。12個入り100円で販売し、当日は二日間で758袋を売り上げることができた。

#### ○Gカフェ

Gカフェは、今年5周年を迎えることができた。周りの方々の支えに感謝している。5周年を記念して、商品を買っていただいたお客様にくじを引いていただき、当たった方にフード選択者手作りのコースターをプレゼントした。

また、今年は今まで使用していたコーヒー豆とは違う豆を使用し、味の変化と経費削減にも力を注いだ。今年の新商品として「アイスクキャラメルラテ」(図16)を販売した。このアイスクキャラメルラテは好評で、午前中に完売した。昨年先輩方からの引継ぎでもある、Gカフェの目標杯数1,000杯を達成することもできた。

#### □保健所の指導を受けて

本年度より保健所の審査がさらに厳しくなり、多くの指導を受けた。そのため、今年度より菓子類を作るために短期間(3ヶ月内)菓子製造許可書を申請し許可をいただいた。販売のための表示ラベルを今までの形式でよいか確認していただくために、鹿児島市保健所食品衛生係と鹿児島県庁食の安全推進課へラベルをFAXで送った。鹿児島市保健所食品衛生係は食品衛生法で、鹿児島県庁食の安全推進課はJAS法で、それぞれ調べてもらった。その結果、薄力粉は小麦粉と表示する、重曹はベーキングパウダーと同じ役割であれば省いてよい、バニラエッセンスは香料で、添加物として最後に表示するなどご指導をいただいた。また、ラベルに賞味期限を記載するためアーモンドココアクッキーを福岡県の株式会社日本食品機能分析研究所に依頼し、賞味期限検査を2012年9月12日(水)に行った。試験検査項目は一般生菌数、大腸菌群、黄色ブドウ球菌である。制作日から四週間までの期間で検査を行った結果、異状はなく制作日より二週間の賞味期限で掲載した。アップルパイは鹿児島純心女子高等学校が検査を行っており、それに準じて掲載した。

Gカフェは実際にリーダーが2012年8月21日(火)に保健所を訪問し、担当者から制作過程



図15 販売用クッキー



図16 アイスクキャラメルラテ



について直接多くの指導を受けた。そのため、来年度に向けて、ネスカフェドルチェグスト（図17）を導入してはどうかと考えた。これはオートストップ機能搭載のカプセル式エスプレッソコーヒーメーカーである。保健所から指導のあった牛乳を温める作業や多くの手が触れての作業がなくなるため、衛生面・安全面ともに改善されると考えている。

#### □振り返り

今年度の大学祭総売上は、以下の通りである（表2）。予想以上の純利益が出て、全員が満足し、達成感を感じることができた。大学祭を通して、集団で一つのものを作り上げることの難しさや思いがけない失敗にとまどうことも多くあったが、全員が一致団結し協力していくことの大切さを学ぶことができた。また、多くの人に支えられて大学祭が成功できたと感じており、とても感謝している。フードプロデュースで学んだことを、鹿児島の女性として活かせるよう努めることがこれからの私たちの課題である。また、私自身リーダーをやってみて学んだことは計画的に行動することである。細かい計画を立てて行動することで、リーダーの仕事がスムーズに行うことができた。リーダーはもちろん、フードプロデュース選択者全員が多くのことを得られた大学祭だった。（西村琴奈）

表2 大学祭総売上（単位：円）

部門	売上	経費	純利益
Gカフェ	188,850	61,523	127,327
クッキー	75,800	32,053	43,747
アップルパイ	99,00	65,736	33,264
合計	363,650	159,312	204,338



図17 ネスカフェドルチェグスト

## 結 び

もともと、Gプロジェクトは、「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略—コミュニケーション力・プロデュース力・グループ力の育成—」という課題で、文部科学省の特別補助である「学部教育の高度化・個性化支援メニュー群」における「教育・学習方法等改善支援」の交付を受けて、進められた。

最近の学生は、個性豊かではあるが、一方、協調性や共生力が不足している面もみられる。現代ビジネスコースでは、グループでのコミュニケーションを通じて集団でプロデュースする力の育成を目指している。そのため、特別にプログラムされた教科に基づき、個性の伸長を図るとともに、学生の総合的な人間性を高めることを目的としている。この教育戦略実現のため、学生の個々の能力をリフレッシュさせ、さらなる集団的プロデュース力をより現実的なものにしていかなければならない。

この目的を掲げてから、5年も経過している。毎回、“Gプロジェクト”を通じて、学生が多くの困難に直面しながらも、自分の能力を最大限に発揮し活動する機会を得たことは、大きな

収穫である。学生たちは、自分たちで設定したテーマや目標の実現に向け、さまざまな苦勞を体験した。そして、学生にとって大きな目標となったのは、先輩たちの存在であると感じる。大学祭を通してどのような「未来の花」を咲かせようかと考えながら学んだことは、今後の学生たちの糧となるであろう。

共同でなにかをなしとげるためには、多くのことが要求される。リーダーの学生はもちろん、すべての学生が「コミュニケーション」の難しさを知ると共に、「報告、連絡、相談」の大切さを実感したはずである。これから社会人として活躍する学生たちが、自らコミュニケーションをとるように心掛け、自分がどうあるべきか状況判断のできる人材、すなわち「社会に必要とされる人材」として働いていけるようになることが、現代ビジネスコーススタッフの願いである。人間に無限の可能性が見出される限り、我々のプロジェクトはさらなる発展を目指してより精力的に続けられなければならない。そこに、我々の教育戦略が存在する。